



京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

介護のつどい（一緒にお話しませんか）

日時 2013年7月27日（土）13時から15時

場所 女性研究者支援センター

京都大学の教職員、学生、そのご家族を対象として、介護のつどい（一緒にお話しませんか）を開催しました。

自己紹介の後、介護経験のある方の体験談を聞きました。夫の介護をされている参加者からは、有料施設を利用したこともあるが、現在は夫婦2人で色々なサービスを利用しながら自宅で生活しており、健康に気を使い頑張っているというお話がありました。20年近く実母を一人で介護している方からは、ストレスがたまると、母に優しく接することができなくなるという悩みが出されました。とにかく自分が孤独で、誰か一人でも身近なところにいてほしいと思うとのことでした。また、介護サービスのスタッフにも、改善をお願いしたいこともあるという意見も出されました。

現状の制度や仕組みでは、身内に介護が必要になった場合、仕事と介護の両立は困難なので、仕事を辞めるしかないという結論に達しがちですが、子どもを親や保育園に預けて仕事を続ける女性が、介護となると『自分が仕事を辞めなくては行けない』と思うのはなぜか？ということを考えてみました。やはり、一人で抱え込みすぎではないか？という考えが出されました。

介護はする側・される側の相互作用で、お互いの信頼関係が大切であること、介護者は軽い運動や歌を歌うなどのストレス解消法をもつとよいなど、介護のための知識や技術を互いに確認しました。

最後に、育児介護WG推進員の鈴木和助助教より、介助時に便利なグッズの紹介もありました。

介護のつどい (一緒にお話しませんか)

介護のなやみや
知度を
共有したいな

腰を痛めない
介助方法を
知りたいな

介護サービス
の悩みを聞いて
ほしいな

日時：2013年7月27日（土）
13:00～15:00 (12:30受付開始)

場所：女性研究者支援センター
参加対象：京都大学の教職員、学生、そのご家族
 （介護中の方以外のご参加も可）15名

プログラム

- ・ほっと一息つきましょー ほっこりタイム
- ・介護の経験を語ろうー ほのぼのつながろう
- ・介護の悩み、工夫や知恵を交換しよう
- ・腰を痛めない介助法をちょっと紹介 など

申込方法：女性研究者支援センターホームページ
 (<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>)

介護のつどい申込入カフォームより、お申し込みください。
締切：2013年7月17日（水）
 問合せ先：京都大学女性研究者支援センター
 TEL：075-753-2437 E-mail：w-stien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp



ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」

ジェンダーや性差について、学生の理解・知識を深めるために、ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」を開講しました。全15回を11人の講師で担当し、オムニバス形式で講義を進めました。



女子高生・車座フォーラム2013



女性研究者支援センターでは、高校生の皆さんに研究者や科学者の仕事を知ってもらうために「女子高生・車座フォーラム2013 京都大学を知ろう・研究者と語ろう」を実施します。フォーラムでは、理系・文系それぞれにどんな研究分野や領域があるのかといった大学進学に関わる話をはじめ、研究の面白さや苦労、専門職や研究職など大学卒業後の将来設計のための心得、研究論文の執筆や学会発表といった研究者の仕事内容、子育てや介護と研究生活の両立方法など、さまざまなテーマについて、教員や大学院生、学生が疑問にお答えいたします。

京都大学がどんなところなのか、大学ではどんな勉強や研究をするのか、また大学卒業後の進路にはどんなものがあるのか、など、色々な疑問をお持ちのみなさん、京都大学の企画する「女子高生・車座フォーラム」にいらっしやいませんか？保護者の方々の参加も募集します。ホームページより、申し込んでください。

- ・日時 2013年12月15日(日) 10時から16時30分
- ・場所 京都大学 芝蘭会館他
- ・募集定員 女子高校生80名程度(先着順)・保護者40名程度
- ・申込期限 2013年11月15日(金)

ジュニア・キャンパスにゼミを提供

日時 平成 2013 年 9 月 14 日（土）14：30～16：00
場所 京都大学女性研究者支援センター
参加者 京都市およびその近郊の中学生

今年度も、京都市教育委員会との共催で、「京都大学ジュニアキャンパス」が開催されました。本事業は、中学生の皆さんに、学問の最先端を研究している現場に触れて、楽しさや面白さを感じてもらい、自分の興味のあることを深め、将来学びたいことを考えるきっかけを作ってもらうことをめざしています。今年度のテーマは、「ひらけ！ 好奇心の玉手箱」です。法律、言語、理学、工学、医学など様々な分野から、実験、工作、自然観察といった体験型の授業や討論を通じた授業などが行われました。

女性研究者支援センターは、伊藤 公雄教授（文学研究科）と、センターのポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」の受講生 4 名（文、法、経済、農学部生）が講師となり、ゼミ「大学生と語るジェンダー（「男らしさ」「女らしさ」などの社会的性別）」を実施しました。ゼミには、女子 4 名、男子 4 名の中学生が参加しました。名古屋市や倉敷市など近畿以外からの参加もありました。

はじめに、伊藤公雄先生から、女性研究者支援センターの沿革や目的について説明がありました。そして、待機乳児保育室を見学した後、一度外に出て、センターの外周をみんなで散策しました。現在、女性研究者支援センターは、建替工事のため、橘会館で活動しています。橘会館は、1911 年に竣工された旧帝国大学総長官舎を改築した古い日本家屋風の施設です。庭には聖護院の森のなごりで、建屋よりさらに古い樹木が茂っています。今年度は、ワークショップも和室で行い、中学生に、より京都らしい雰囲気を感じてもらおうことが出来ました。

まず、緊張感をほぐすために、アイス・ブレイクを行いました。身振り手振りだけで意思疎通を行い、1 月 1

日から誕生日順に並ぶアクティビティをしました。はじめて出会う中学生と大学生ですが、あっという間に打ち解けて、すぐ並ぶことができました。

自己紹介をして、なごやかな雰囲気になった後、「ジェンダー」という言葉の意味について、大学生から簡単な講義をしました。そして、2 グループにわかれ、ワークショップ「メディアのなかのジェンダー」を行いました。雑誌のなかの女性像／男性像を切り抜き、模造紙に貼りつけ、完成した作品を壁に貼り、男女の表現のされ方の違いについて観察・発見したことを記録し、グループごとに討論しました。

次に、子供向けテレビ番組のキャラクターにみる男性・女性キャラクターの登場回数や特徴などを分析し意見交換しました。「アンパンマン」の大ファンで、各キャラクターに詳しい 2 人の女子中学生が活発な進行係になり、楽しい話題提供のもと討論が行われました。

最後は、2～3 人の小グループになって、受験や進路、キャンパス・ライフなどについて中学生から質問を受けました。「特に問題意識を感じていないので、ジェンダーを勉強する意味がわからない」という質問には、農学部学生が、「今、自分にとっては問題がなくても、ジェンダーについての問題は世界のあらゆる場面にあることなので、在学中に学んでおけば、将来役立つのではないか」と回答しました。他にも「科学研究もしたいし、企業にも行きたいがどうしたらよいか」、「女子学生で一人暮らしをしている人はいるのか」、「どうやって勉強中の集中力を高めることができるか」などさまざまな質問がありました。大学生も過去の自分を振り返り、互いに有意義なワークショップとなりました。

今後も、女性研究者支援センターは、次世代向けの活動を継続していきます。12 月 15 日に開催する「女子高生・車座フォーラム 2013」においても、ポケット・ゼミ生がファシリテーションを行います。



連載：研究者になる！－第43回－

興味のおもむくままに

化学研究所・助教
今西 未来



「研究者になる！」というほど強い動機を意識したことがなく、何を書こうか、本当に悩んでしまいました。私の現在に至るまでの体験談になってしまい、気恥ずかしいのですが、女性研究者や博士課程進学者は実際まだ少なく、少しでも参考になれば嬉しいです。

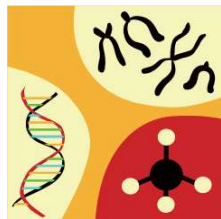
実験への憧れと、遺伝子への漠然とした興味から薬学部に入りましたが、学部時代は大学の「自由な気風」の中で、全く「学問」を意識しない生活を送ってしまい、将来のことは考えていませんでした。大学院を選ぶときは、何か、生命科学の根幹に関係がありそうなDNAへの興味から、宇治キャンパスの化研にあった研究室を選びました。

大学院では、科学への関心が高いメンバーが多く、また、かなり自由に実験をさせてもらえる環境でした。そのため、実験が楽しく、自然と博士課程への進学を決めました。「先のことはわからないので、面白いと思えることをやってみたい」と楽天的に考えていました。父が数学者で、心から数学を楽しんでいる様子を見て育ったので、研究者としての生活への不安がなかったことも大きな要因だと思います。ただし、お金もかからず頭の中のできる数学と、研究費や人の協力、実験設備なしには進まない実験系との生活様式の違いに後になって気がつきました。一口に「研究者」といっても、その生活様式は様々です。でも、研究内容に何の制約もなく自由に考えられるということが、大学での研究職の最大の特権であり、興味に逆らえないのも、研究者としては仕方がないことではないでしょうか。

博士課程修了後は海外に出てみたい、興味ある論文を出しているアメリカの研究者にメールし、乏しい英会話力ながら面接に出向きました。今となっては、英語力をはじめ、紹介や奨学金の有無を気にせず、大した度胸だと思いますが、答が出そうにない問題には、あまり悩まずに興味の方向に進んで行けば何とかなるように思います。また、婚約するでも別れるでもなく、留学後の

状況もわからない状態で応援してくれた今の主人の理解もあつての留学だったと思います。（女性研究者に限りがませんが、仕事を続ける上で、理解あるパートナーを選ぶことは重要です！）ただ、1年たたないうちに、帰国の話があがりました。まだ、後につながる何かを得たという実感がない時期で、かなり迷いましたが、留学後は日本で職を得たいと考えていましたし、その時に研究環境の整った常勤の職に巡り合えるかは賭けだと思いました。「遅かれ早かれ、自分の研究をするのだから」というアドバイスに後押しされ、結局、1年3ヶ月のアメリカ生活後、京都に帰りました。

結婚し、また仕事では、大学院時代の研究をベースにDNA結合タンパク質に関する研究をスタートさせました。新しい興味から、当時全く素人であった「体内時計」の研究への提案書を出したところ、私にとっては大きな研究プロジェクトに採択されました。興味中心に直感で行動し、楽天的に進んできた人生だったのですが、その時は、大きなプロジェクトという不安も大きく、子どもは5年間ちょっと無理・・・と、研究センターの生活を送ることにしました。それまで、周りに子育て中の研究者がいなかったため、全く、そのような生活が考えられなかったのです。そのプロジェクトの中で、子育て中の女性研究者に出会い「何とかなるもんだ」と実感し、また、「長い目で見てトータルとして理想にかなう生活ができれば」という意見を伺いました。子育てへのハードルは下がり、また、研究にゴールや目星がつくことはないということをやく悟り、出産に踏切りしました。運良く、現在は3歳と0歳の2人の子どもの恵まれ、保育園と実家から通ってくれる母に助けをもらいながらの生活です。時間の制約や睡眠不足は予想以上に大きく、何とかなっているのか今は正直わかりません。でも、これからも続けたい長い研究生活のほんの数年と割り切り、研究生活も家庭生活も豊かにしたいというわがままを叶えるべく、奮闘中です。家族やラボのメンバーには感謝しきれませんが、周囲に感謝の気持ちを持って、研究には集中力と独創性を大切にしていきたいと思います。



Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>